

# Freakとしての女性芸術家主人公 Mick Kelly<sup>1)</sup>

河 島 美代子

女性芸術家小説の主人公たちはおしなべて男の子のような性格設定の活発な少女として登場する。『若草物語』のジョー、『黄金の林檎』のバージ、そして『心は寂しい狩人』のミック・ケリー。彼女たちに共通する性格設定は、女性芸術家小説自体の少ない時代においては単なる偶然であるというには全体に占める割合が高く、女性芸術家主人公の原型ともいえるほど類型化され、女性芸術家小説が増えた20世紀後半においても繰り返されている。その意味で若い女性芸術家主人公は全てが類似した少女である<sup>2)</sup>。『心は寂しい狩人』(1940)はカーソン・マカラーズのデビュー作であり、Part 1, 2, 3で構成される<sup>3)</sup>。アメリカ南部の工場町を舞台に、男装の少女ミックが音楽家になろうとして挫折する物語である。なぜ女性芸術家主人公は同じような両性具有的性格のtomboyとして設定されるのか。本論文は女性芸術家主人公像が両性具有的性格設定のtomboyとして描かれることの必然性を探るものであり、女性性の罫に捕えられた女性芸術家小説であることを証明するため、ミックの服装、空想、鳥のイメージ、結末のミックの言葉に着目する。

## 1 Freak 特有の衣装としての男装

女性芸術家小説において芸術家になる夢を抱く少女たちはほとんどの場合少年のような精神性と肉体的活力にあふれた、女性として一種の異端者、奇形として登場する。少女の「成長」は、男の子と見紛うようなエネルギーや振舞が肉体的、精神的成熟に伴い次第に影を潜めていき、異性愛の世界に入っていく

段階をもって少女から大人の女性へと転身を遂げたと思なされることが多い。女性芸術家主人公たちの「成長」もこの文脈から自由ではない。『心は寂しい狩人』における音楽家志望の主人公ミックは両性具有的性格設定のtomboyとして登場する<sup>4)</sup>。女性芸術家の少女時代のひとつの例といえるが、ミックが男装をしていることで芸術家志望の女性の特異性を際立たせている。ミックの心の中にいつもあるのは音楽である。ミックはラジオから流れてくるモーツァルトの曲を聞き、芸術的目覚めを体験する。日曜日になると間借り人のラジオから流れてくる音楽を聞くために階段に腰かける。音楽を聞くために出かけていき、ひとり膝を抱えて聞き入るミックの姿は『心は寂しい狩人』の中で繰り返し描かれる。音楽に対する真摯な聴衆ミックのイメージは一人でラジオを聞く姿に集約され、芸術家主人公ミックの輪郭が浮かび上がるのである。多くの人に囲まれて暮らし、自分だけの時間も場所も確保しがたいミックであるが、一番欲しいのはピアノである。

‘But there’s one thing I would give anything for. And that’s a piano. If we had a piano I’d practise every single night and learn every piece in the world. That’s the thing I want more than anything else.’<sup>5)</sup>

ピアノはミックが内に秘める芸術家としての音楽的感性を外に向けて表現する手段である。ミックが男装を解き優雅なドレス姿へと衣装替えをし「成長」していくに伴い、当初抱いていた芸術への野心や熱意は徐々に影を潜め、活力を失い、ten-cent storeで働く佻しい職業婦人として結末を迎える。ミックの服装の変化は女性性の受け入れを視覚化するとともに、彼女の芸術へのめざめ、葛藤、そして挫折を表わす指標である。

Part 1のミック登場の場面から考察を始める。ミックは背が高くショートパンツをはき男の子のような外見をしてNew York Caféに現れる。New York Caféの主人ビフは肢体不自由者や口唇裂のような形態異常をfreaksと呼び、彼らが店を訪れる時には厚意から特別な計らいをする。南部の作品においては白子や白痴などの肉体的奇形や精神的異常が多く登場するが、これは南部での階

層問題に起因する。フォークナーやオコナー、ウエルテイーの作品にも登場する形態異常は社会の中でのグロテスクの表象であり、彼らの頻繁な登場は南部性のひとつでもある<sup>6)</sup>。マカラズは『心は寂しい狩人』において聾啞者のシンガーを重要な役どころに据えているし、『結婚式のメンバー』において見世物小屋のfreaksの中に異常に背が高い人物や小人に混じって両性具有者を登場させる<sup>7)</sup>。ピフは客の中のfreaksに向ける関心や饗応と同種のをミックにも示す。ピフの意識の中では男装の少女ミックは、さまざまな奇形と同等のfreakなのである。ピフが思い浮かべるミックは、目を細め髪を掌でかき上げ、しゃがれた男の子のような声と映画のカウボーイのように踏ん返り返って歩く男っぽい仕種をする少女である。

一般的に男の子の理想的特質とされる体力的優越性や反抗的、冒険的な性格設定が女の子に当てはめられると、両性具有的なtomboyとして設定される。女性芸術家主人公は概してエネルギー溢れるtomboyである。ミックもその例にもれず、木登りが得意で取っ組み合いの喧嘩も厭わない。特別の許可を得て学校の科目も「男の子のように」mechanic shopを履修し、おしゃれや映画スターにのみ関心を向ける「愚鈍」な姉たちを毛嫌いし、自らが女の子であることにうんざりしている少女である。一方で裕福とは決して言えない家庭の中で学校へ通いながら下宿屋を営む母の手伝いや幼い弟の子守もする。大家族のなかで労働力として与えられた役割を忠実にこなす働き者の孝行娘である。ミックの描く絵には人混みをかき分ける絵や逃げ惑う人々に踏み潰される絵があり、大勢の人に囲まれた暮らしがミックを精神的に抑圧していることを反映する。

ミックがピフの店に来るときは弟をつれているとき以外はひとりで、同年代の女友達が一緒のことはない。思春期の真中にいるミックは周囲より飛び抜けて背が高いことで見世物小屋の大女freakになるのではないかと恐れている。しかしミックのfreak性は大人の女性になることへの本能的な恐怖と自身が女性であることを受け入れたくない女性嫌悪とが混じり合い、男装という形で視覚化されている、女性性の拒絶にある。南部女性は伝統的に、職業を持ったり

芸術的もしくは政治的分野で自己達成を追求することは歓迎されていないかった。これらの分野は女性としての領域を超越する行為とみなされ一種のfreakとされた<sup>8)</sup>。女性の領域とは家事育児に専念する母であり、その予備軍としての、未来の男性を待つために自分を美しく磨くことに余念のない娘たち、更には家事の一端を担う労働力としての子供である。ミックの母は家業に忙しく作品中にはほとんど存在感がない、不在の母である。ミックの姉たちは不在の母に代わりミックの社会化教育に熱心でミックの男装を窺める。ミックは成長に伴う自分の体の変化を隠したい一方で、容姿にばかり関心を向ける姉たちのようにはなりたくない。女の子らしい服装をするよう迫る姉たちと男装に固執するミックの口論は、平行線を辿る。ミックの反論は女性があるべき理想の容姿、服装、行動規範を定義する社会的慣習に対する抵抗であり、見られる客体として存在する女性像に対するたった一人の反乱である。孤軍奮闘するミックの葛藤は男の子になりたい願望として表われ、男装はその衣装である。

Part 2 は女性性の受け入れが進行するなか、ミックの芸術家としての自己も成長し、さまざまな葛藤を引き起こす章である。芸術家の卵としてのミックは夏の間、昼間は相変わらず子守をこなしながらも夜のひとりの時間を大事にし、独学で音楽の勉強をする。夜の町に出ていき裕福な家庭から聞こえてくるラジオに耳を傾け音楽の事だけ考え一人で歌うときが一番充実した“realest” (93) 時間である。

女性作家による女性芸術家小説の類型性の一つに、中途半端な芸術志向の女性性がある。彼女たちは慣習が求める理想の女性像を体現しつつ、女性役割の枠組みの中で芸術を家庭生活の潤滑剤として捉える。女性性と芸術家自己の葛藤が生じることのない趣味の世界で生きる彼女たちの存在は、女性芸術家主人公を女性像からの逸脱者に見せる脅威であると同時に、真摯に芸術の道を進もうとする主人公を英雄的に見せる引き立て役として機能する<sup>9)</sup>。『心は寂しい狩人』においてはベイビー・ウイルソンが引き立て役にあたる。ピフの姪のベイビーはミックとは対照的である。ピンクづくめの服装をし人形のように

かわいいベイビーは、幼児でありながら見られる客体としての完璧な女性像を表わす。4歳にして既に他人の視線を意識した大人の女性のような立ち居振る舞いをし、将来の職業選択に役立つようダンスレッスンに通いピアノの修業も始めようとする。ベイビーは「才能ある子供は特別待遇が必要」とのベイビーの母の後押しを得ている。一方ミックは音楽家を目指しながらピアノも持たず、専門教育も受けられない。芸術への野心以外は何も持ち合わせないミックはベイビーとは対極にいる。ベイビーの存在は、一つの道に秀でるためには環境も大きな要因の一つであると思わせる。しかしベイビーの演技は年齢相応の子供っぽい中途半端なもので、体育館でボールをぶつけられながらもピアノ練習に励むミックのような真剣味に欠ける。このような点でベイビーはミックを英雄的に見せる引き立て役なのである。

芸術家の卵としての成長だけでなく、ミック個人としても成長はみてとれる。ミックは何か新しい事実を発見したわけではないが、突然父を理解するのである。失業し一家の主としての役割を果たせないでいる父が、不安と居場所のない寂しさを抱え話し相手としてミックを求めていることを感じ取り、受けとめられるほどにミックは感受性を成長させている。ミックの更なる成長の証は新しく始まる高校での生活に向けて人間関係を良好に築こうとする社会性の芽生えに見いだせる。親しいグループに入りたいという帰属願望がブロムパーティを主催するという発想へと展開する。近所の子供たちが乱入しパーティがただの遊びへと変化していくにつれ、高校生に対して漠然と抱いていた恐れはなくなり、ミックの精神的な成熟が確実に進行していることが伺える。

しかしピフが規定するところのfreakであるtomboyミックが、異性愛を大前提とするブロムパーティを開くということは、ミックが拒絶していた女性性の受け入れ宣言ともとれる。ミックはパーティを開くにあたり家族を巻き込んで周到な準備をする。内装に凝り招待客を厳選し食事に気を配りドレスとティアラで着飾ったミックは、『目覚め』のエドナが晩餐会において女王のように君臨したことを想起させ、女性の領域である家庭の中で生き活きと立ち働く女主

人のようである<sup>10)</sup>。そしてこのパーティにおいてドレスに着替えることがミックの大きな転機となるのである。ミックは姉から借りたイブニングドレスを身に付ける前に入浴する。入浴場面は男装を解き tomboy から女性への転身ともいべき儀式的なものである。ゆっくりとバスルームにはいり“old shorts”(97)をさっと脱ぎ捨て、肘、膝、踵を時間をかけてごしごし洗うミックは、つるりとした肌の赤ん坊のように“naked”(97)裸で部屋へ走り、絹の下着を身に付ける。入浴は殻のような角質層を古い自己を捨てるように脱ぎ捨て、プロムパーティで男性にエスコートされる優雅なドレス姿の女性になるための生まれ変わりの儀式である。そしてこの儀式はミックがパーティに出る女の子にふさわしいパンプスの中に足を入れたとき完了する。化粧をした鏡の中の姿は自分でないみたいに美しいと、ドレス姿の自己を受け入れミックは満足する。しかし裸のミックが家の中を移動し、着丈の足りないドレスと小さくて窮屈なパンプスに足を押し込み、しわになるのを気にしながらバスルームで時間潰しする様子は本人が大まじめである反面、滑稽である。あれほど嫌悪した姉たちと同じ、自分の容姿を磨くことに全身全霊を傾けるありきたりの女の子になるために二時間前から準備するミックの入浴場面にはミックを滑稽に見せる効果も含まれている。

ミックの女性性の受け入れは、二度にわたる儀式的な入浴と服装の変化によって視覚化される。家計の更なる困窮を救うべくウールワースの求人ミックが応募することになるが、面接用のドレスに着替える際もミックは入浴する。少しでも年上に見えるようにと化粧をし姉たちの服やアクセサリを借りたミックの外見は、男の子たちと走り回っていた頃とは別人の着せ替え人形のようなものである。面接の衣装は雇主の値踏み耐えるものでなければならない。ベイビーの母がベイビーの将来を見据え、いかにベイビーを高く売るか腐心する視線と同じ、女性を商品化するという観点からなされる吟味である。ミックはたしかに他人の視線によって値踏みされ存在価値を得る“a regular lady”(276)へと転身する。しかしそれと引き替えに音楽への熱意は徐々に影を潜めていく。

ミックの転身は男装から、ドレス姿への服装の変化によって明示される。ミックの服装は女性性を受け入れるという変化を表わすと共に芸術家としての夢が挫折していく道程を視覚化する指標なのである。

## 2 ミックの空想とその変化

ミックの空想は男女の領域を超えようとする願望を表わし、自立した強い自分を思い描くというイメージトレーニングである。そしてこのイメージトレーニングが奏効し、芸術家としての自己の成長を支える。しかし、男装を解き女性性を受け入れるに従い空想に変化が見られる。

Part 1において男装で登場するミックは自身の将来像をあれこれ夢見る。M. K. というイニシアルを付けた車に乗っていると、偉大な発明家になって超小型ラジオを作ったり、中国までトンネルを掘ったり、気球を作ったりと、社会通念上の男女の境界を超えた夢想をする。また、ウクレレからバイオリンが作れると本気で考えたり17歳で名声を手にして自分を思い描くミックの夢想は、不可能を可能にする子供ゆえの無知を基盤とした自由な発想であるとともに、自立した自己像への願望が読み取れる。12歳のミックの目には、17歳が自己も他人も制御できる完全な大人に映っているのであろうし、のちに15歳のミックが20歳になれば交響楽団を率いていると空想するのも同じ発想からである。これらの空想はまた、ミックの男の子願望を反映するものである。自身を男性に置き換え性差の壁を乗り越えようとする空想は、男性優位社会に挑戦的な過激な発想である。しかしながらウクレレからバイオリンが作れると本気で信じているように、ミックの空想の基盤を支えているものは傍目には明白な無知である。ミックの性差超越的な空想は反社会的な気配を漂わせながら、その実体に於て実現の可能性がありそうもない、子供ゆえの世間知らずに基づいた妄想癖に見える仕掛けとなっている。作品中で何度も形を変えて繰り返される男女の領域を超えた過激な発想は、無知な子供の空想として免罪符を与えられ、ミックの空想の世界の拡大増長を許容する。

ミックの夢想は二つの側面をもちそれぞれに効用がある。一つは大人になる願望をもちながら中身は子供である思春期の精神の不均衡を表わすものである。南部の暑い夏の日常から逃れたい思いからくる寒い国や雪への憧れが、有名になった自分が著名人とスケートをするという空想へと展開するのがその例であり、現実逃避と名声願望を満たす。もう一つはミックの空想が芸術家としてのミックの成長を支えている側面である。ラジオを聞くために夜の町をひとり歩くミックは多くの女の子たちが心配するレイブを妄想だと笑い、襲ってくる男性を返し討ちにする空想をする。男性に引けをとらない肉体的な強さに自信をもち、とんでもない大男なら逃げるけれど自分とたいして違わないような体格なら一発おみまいしてやる、と豪語するミックは『悲しい酒場の唄』のアメリカを想起させる強い少女、まさにtomboyである<sup>11)</sup>。男性に負けない強い自分を想像することで多くの少女が抱く、暴力の被害者としての自身を空想するレイブファンタジーを覆す<sup>12)</sup>。被害者としての自身を軸に空想を展開させるのではなく、また、男性に助けられるのを待つお姫様願望にも発展せず、自己も他人も制御できる自立した力をもった自己像を夢想する。ミックの空想の力が、実際は男性に襲われる被害者となる確率が高い少女に、自分は強いと思わせ、男性を打ちのめし歩き続ける英雄的な空想を描かせる。強い自己像はイメージトレーニングの様相を見せ、この空想のおかげでミックは「暑く」「秘密」で「最も大事」な夏を音楽の勉強に打ち込めるのである。男装の頃のミックは弱い立場に陥りがちな少女の状況を空想の力で塗り替え、強い自分を信じ、芸術家としての自己の成長を支えるのである。

男装を解いた儀式的な入浴の後、視覚的に女性性を受け入れたように見えるミックの空想に変化が現れる。新学期が始まり赤いセーターと青いスカートの通学服に変えてから、ミックの空想の中の自己像に女性であるミックが混じるようになる。シンガーとの関係性を求めるミックは空想の中の彼を自家製の神から男女関係の相手へと変えていく。ドレスを着て香水をつけたミックは、自分が香水をつけていることにシンガーが気づくだろうかと、空想を巡らせる。



また、ミックは自分が弟にとってひとりの女性であるとしたらと空想し、弟に姉でなくても愛していたかと聞いてみる。ミックは男装を解き鏡に映るドレス姿の自己像を見てから、女性としての自分が“beautiful”(97)か“sap”(97)か、見られる客体としての存在価値を計るようになる。そして空想の中にも女性である自己像が登場するのだ。

このころのミックは、前述のように20歳になれば世界的に有名な作曲家になり、カーテンに金文字でM. K. と書かれたステージで交響楽団の指揮をする自分を空想する。しかし従来、伝統的に男性の世界とされてきた芸術の世界において、作曲家や指揮者はとりわけ男性が独占してきた分野である。そのような指揮者を目指すというところにミックが芸術家としての夢を実現させる可能性が、極めて低いことが暗示され、指揮者になる夢は無知な子供の発想と片づけられる危険性を孕んでいる。指揮者の空想で興味深いのはステージに上がるミックの服装である。ミックは男装をするべきかドレス姿が決めかねているのだ。ミックが男装をしていたころの空想はすべて、自身を男性だと夢想することで成り立ち男性としての空想上の自己像に揺れはなかった。男装を解いた後では前に述べた女性としての空想と、ファシストと闘う男装に短髪の男性としての空想というように、空想の中の自己像を使い分けている。さて、指揮者である自分が身につける衣装が男性用か女性用か決めかねるとはミックのどういうことを示唆するのであろうか。自分が作った曲をオーケストラを率いてステージで指揮する夢想はミックの描く芸術家としての成功物語である。つまりミックは芸術家としての自己を極めさせたことになる。男性の領域とされる指揮者のステージに女性であるミックが男性と見間違えられるような男装をして上がるよりも、明らかに女性であるとわかるドレス姿で上がるほうが男性の世界へ踏み込んだ女性という視覚的衝撃は大きい。だがそれだけではない。男装を解いたミックは女性としての自己像も受け入れつつあり、芸術家としての自己と女性としての自己との二つの自己を所有している。芸術家自己の晴れ舞台に、見られる客体として申し分のない“a red dress with rhinestones”(212)で立つ

ことは、二つの自己を確立させることに成功したといえる。赤いドレスでステージに立つ指揮者の自己像の空想はミックの芸術、そして同時に、女性性での達成を両方手に入れた理想の自己像である。空想の中のミックは芸術も女性性も両立させているのだ。

しかしミックの理想の自己像が空想の中だけで終わってしまうのは現実世界のミックを見れば明らかである。女性性の受け入れが空想の世界にも影響を与えるにつれ、夜の時間の遣い方にも変化が現れる。男装の頃は夜はラジオを聞きに出かけていき音楽の勉強をする時間であった。しかし今やベッドの中で目を覚ましていると天井がゆっくりと自分の顔に向け迫ってくるような“queer afraidness”(273)を抱えるようになる。この正体のわからない恐怖は女性としての大人の世界が迫ってきていることを本能的に察知する恐怖なのであろう。そしてウールワースで仕事することになり、いよいよ女性として大人の世界へと踏み出すことが決まると、他の女の子と同じように夜の闇が恐くなり出かけることもできない。かつてミックの空想は自分は強く男性の領域にも入っていけると思わせる効用があった。強い自分を信じることで芸術家としての自己が独学を続ける力を与え、野心以外は何ものも持ち合わせない逆境をはねのけ、音楽の道を進み偉大な作曲家として交響楽団を指揮する目標を持たせた。ミックの空想は芸術家としての自己が成長する後押しをしていたのである。しかしながら男装を解いた後に進行した女性性の受け入れに伴い、空想も女性性の枠組みに捕われ、音楽の世界へ飛び立とうとする芸術家としてのミックを圧迫し始める。女性性の受け入れは服装の変化という外面的なものにとどまらず、内面化されていく。空想の変化は芸術家をめざすミックの自己が徐々に女性性の罠に捕われていく様子を表わすのである。

### 3 鳥のイメージ

作品中に出てくる鳥のイメージは芸術家としてのミックの夢が挫折することの暗示となっている。最初の鳥のイメージは子守の合間に工事中の家の屋根に

登る場面に現れる。屋根の天辺に上がるミックは数少ない勇敢な子供たちのうちの一人であり、ミックのtomboyとしての資質が強調される。屋根の上で翼のように両腕を広げる様子は飛び立とうとする鳥のようである。頂上に立った子供たちは、ほとんどが男の子であるが、たいてい歡喜の叫び声をあげる。ミックは、かつて屋根に登った男の子が演説をしたことを思いだし、歌おうとするがどうしてもできない。ミックが歌えないのは、男の子と同じような力と成功する可能性をもちながら、そして成功を望みながらその道を進むのが恐い女の子の複雑な心情の表れである。夜の工事中の家で男の子にまじって遊びながら怪我をする女の子の挿話がある。床がないのに気づかず飛び込んで足を折る女の子の話は、男の子の領域に女の子が入っていくことの危険性を示唆する。勢い込んで踏み出したにも拘らず床がなく奈落へ落ちる女の子の話は、ガラスの天井に頭をぶつけるキャリアウーマンの話にも似て、道が用意されていない領域にまで足を踏み入れた女性が迎える行く末を暗示する。これは男の子になりたい願望を抱えるミックが性の境界線を越えようとして奈落へ落ちていくことをも暗示する。いわばミックは挫折を予定された状況の中で飛ぶ練習をしているのだ。ミックが両性具有的性格のtomboyであることは予定された挫折へと向かう必然的な設定なのである。女の子は成功するよう期待されていないし、自己主張のために声をあげる訓練もできていないのである。ミックは無数の声なき少女たちの代表である。ミックは歌えない鳥のイメージを背負わされたと言える。

次にミックが自分の声を発しようともがく過程を追ってみる。ミックはモーツアルトを聞いて春の雨上がりの匂いを連想する。モーツアルトを聞いているとなぜか悲しくしかし同時に心踊る感覚も覚える。

She hummed one of the tunes, and after a while in the hot, empty house by herself she felt the tears come in her eyes. Her throat got tight and rough and she couldn't sing any more. Quickly she wrote the fellow's name at the very top of the list — MOTSART. ( 37 )

記憶している一節を歌ううちに感極まって歌えなくなるミックは、音楽を受けとめる感受性が鋭敏であることが伺える。ミックが夜の町で歌い出す場面がある。ミックの歌を町中の人々がミックと知らずに聞いているように感じるというこの場面は、静かな夜の通りに響いていくミックの声がじっと耳をすます町中の人々の本当に届いていく感覚がある。聴覚に訴えかけ、夜の町と一緒に聞き耳をたてさせる場面であり、ミックが自分の声を響かせたいと切に願う思いが伝わってくる。

ミックはベートーベンの第三交響曲を評して、神が夜に威張って歩いているようだと言う。しかし曲が進むにつれ、自分自身のための曲だと思う。“This was her, Mick Kelly, walking in the day time and by herself at night. In the hot sun and in the dark with all the plans and feelings. This music was her — the real plain her”(107)。ベートーベンの音楽はミックの心に感動と同時に自身の卑小さを思い知らせる。全世界はこの交響曲で自分にはそれを聞くだけの十分なものが備わっていないという苦悩が拳で太腿を打つという自損行為に走らせたのだ<sup>13)</sup>。表現したいものがありながら表現手段が見つからないときにミックの自虐行為は顕在化する。芸術の世界の奥深さを垣間見たミックは自分の小ささを知ると同時に、宇宙へと思いをはせ、神の存在をも信じるようになる。ラジオから流れた音楽の一部を再現したミックは、広大な世界に小さな一歩を記せた喜びを感じるのである。ピアノを習っている同級生が教えるごく初歩的なピアノレッスンのために昼食代を遣ってしまい空腹で午後を過ごしながらも、自己の内的世界“inside room”(145)をもつ。指揮者や作曲家になる夢や、雪や遠いヨーロッパへの憧れはこの内的世界で膨らんでいく。高校生活や家計の厳しさは外的世界に止め、音楽を志向する自己が外的世界に侵犯されないよう住み分けているのである。こうしてミックは、前述したように、二つの自己を所有し、外側の世界に生きる少女としての自己と内側の世界に生きる芸術家としての自己の両方を成長させようとするのである。

このinside roomでミックは独学で作曲の勉強をし、内的エネルギーを形にし

ようとする。歌詞のない歌や短い曲にも名前をつけ、M. K. のイニシアルをつける。問題は知識がないために表現したいものを形にして写しとれないことである。ミックは表現手段を持たない芸術家だ。ミックは歌えない鳥なのだ。ミックの葛藤は理想とする芸術と自身の知識の無さゆえの表現力の不足という、至高の芸術と現実に力及ばない自分との葛藤だけにとどまらない。女性性と社会との軋轢にも悩まされる運命にある自己を自覚している。幼なじみハリーがピフの店で働きながら学業と仕事を両立させているのをみて、男の子は女の子より優遇されているとこぼす。女の子が仕事をしようすると学校をやめなければいけないし、仕事が学校かのどちらか一つしかないのだ、という。空想の中では音楽と女性としての自己は見事に両立しているが、現実世界ではどちらか一つなのだ。ミックの嘆きはミックがウールワースでのフルタイムの仕事のために学校をやめ、音楽の勉強もできなくなることの伏線となっている。

鳥が今まで聞いたことのない悲しげな歌を歌う場面がある。ハリーと出かけた森での場面である。多くの批評家たちはミックの性体験を女性性の受け入れによる子供時代との別れ、大人の女性へと移行するミックの成長の決定的な契機と捉える。果たしてそうであろうか。語りは帰り道のミックを“very old”(243)で、望むと望まざるとに拘らず“a grown person”(243)であるという。悲しげな鳥の鳴き声はミックの両性具有の子供時代の葬送歌ともとれる。しかし既に述べたとおり、父の寂しさを理解する感受性の成熟や社会性、精神性の芽生えにミックの成長を認めることができる。森からの帰り道における二人の思考を追ってみる。性体験のあとで男の子が罪の意識に苛まれ泣きだし、一方で女の子は蟻に刺された程度の衝撃しか感じていない。“An ant stung her on the ankle and she picked it up in her fingers and looked at it very close”(241)。家を出ないと母親に事の次第が露見すると言い出し実際に家出をするハリーと、自分はもう子供ではないと主張するミックの感覚の相違は喜劇的であり、性的役割の逆転が見られる。家へ帰ったミックを待っているのはいつもどおりの平和な家族の団らんであり、だれもミックに注目しないばかりか、母親は年

頃の女の子らしく身なりに気を遣うよう諭す。身なりに気を配り女性として美しく見えた先に待つものはミックの森での経験であろう。そしてそのような経験はハリーが言う「家を出なければならぬ重大な罪」であるはずだ。母親の社会化教育は矛盾を露呈し、ハリーとミックの感覚の相違と同様、皮肉で滑稽である。ミックの性体験はミックに世界が変わるほどの衝撃も与えず、誰にも気づかれず、家を出る必要もない。ミックは家族の夕食の残り物であるキャベツを皿一杯ぺろりとたいらげるが、キャベツ料理は以前においてはシンガーが嫌いだと聞いて食べられなかったのである。家計が逼迫し、食材にも事欠くようになったケリー一家においては出された食事は文句を言わず食べるしかない。ハリーとの体験はミックの成長過程において拒否することができない面白い食事と同じであり、蟻の死体を埋めたように忘れてしまう程度のものなのだ。

しかしミックの芸術家の自己と女性性との葛藤は男性の存在に気を取られて音楽の勉強に集中できない姿として顕在化する。ハリーとの関係は経験の成就とともにさっさと脱ぎ捨てるようなものであったが、シンガーとの関係は複雑である。シンガーの部屋には彼を自家製の神として祀り上げるミックやピフ他の登場人物たちが常に出入りする。それぞれに孤独を抱える彼らは、耳が不自由で唾のシンガーを永遠の聞き役として求める。ミックはシンガーに語りかける。“You see, Mister Singer? I got this music in me all the time. I got to be a real musician. Maybe I don't know anything now, but I will when I'm twenty” (181). ミックの語りかけは、その大部分がミックの音楽への想いと自分だけの時間や場所への渴望であるが、シンガーが聞き役に徹していることで一方通行の独白と化す。ミックの声は『心は寂しい狩人』作品中で呪文のように響くが、その声には聞き手である弟やシンガーからの反応はない。弟は聞いているかどうかさえ怪しいほどに静かであるし、皮肉にもシンガーはほとんどミックの言うことを理解していない。そしてミックにとってのシンガーは、神のような篤志の聞き役から一人の男性へと変化する。シンガーの後をつけ彼のことば

かり考えinside roomにいられなくなるミックは罪悪感をもつ。ミックの罪悪感は一歩一歩行為に対する道義的な罪悪感だけではない。芸術家の卵として音楽の勉強をするべき義務を放棄していることに対する罪悪感である。“Lord forgiveth me, for I knoweth not what I do”(108)。自分が何をしているのかわからないというのも、自分のほしいものがわからず、またそれを主張する手段もなく、自分自身への内的な独言として処理するしかないミックの苦悩を表わしている。ミックは何度も自己主張を試みる。しかしミックの自己主張はあくまで独言であり、ミックの声は誰にも届かないのである。

#### 4 結末をめぐって

ミックの女性性の受け入れは表面上完成した。ミックの大人の女性への変貌は入浴と服装の変化の儀式的な繰り返しにより視覚化されたのである。この変化は芸術家としてのミックにも影響を与える。フルタイムの仕事がミックのエネルギーを奪ってしまう。“What the hell good it was. All the plans she had made, and the music. When all that came of it was this trap — the store, then home to sleep, and back at the store again”(305)。いまやinside roomから締め出され音楽も心に浮かばない。店と家を往復するだけの毎日で「男の子は学業と両立できる程度の短時間の仕事があるのに女の子はどちらか一つしか与えられない」と言う通り、ミックには音楽の勉強と両立できるような仕事はなく、仕事を取るからには音楽をあきらめねばならない。ミックが成長の過程において同時進行させてきた芸術家としての自己の成長と女性性の受け入れは、ミックに音楽か仕事かの二者択一を迫る。仕事を手にして家庭の中の娘役割を選んだ以上、芸術家としての自己の方はあきらめねばならない。ミックは仕事を取ることで、家計の一端を担う娘役割という名の女性性の罠にはまるのである。

ミックが直面する困難は芸術をとるか、家族の中の調和をとるかの選択である。家計の窮状に自ら進んで面接を受けるミックであるが、彼女の選択は家庭の中で期待される娘役割をミック本人も知らないうちに背負わされていたこと

の証である。したがって家族に認められるという充実感よりも“trapped”(308)何物かに捕えられたという思いがミックを苦しめる。音楽も心に浮かばずinside roomから締め出されミックは仕事帰りにビフの店に立ち寄り佻しい労働者である。チョコレートサンデーとビールを注文することに見られるように、いまだ子供の部分が残るミックは希望が潰えたかに見える将来を考え直してみる。収入から少しずつ貯金して中古のピアノが買えるかもしれない。そうすれば誰にも触れさせず日曜日はずっと弾いていよう。でももし返済が滞ればピアノは回収される。そうなれば引き取りに来た業者と腕力で勝負するんだ、というミックには、音楽を求めて夜歩きし、肉体的に男性に負けない強い少女を自負していた頃の意欲が残っている。芸術家自己を支える空想の力は損なわれずあり、悲観的になりがちな気分を高揚させる働きをする。

## 結 論

『心は寂しい狩人』は独学で音楽家になろうとするミックが女性性の畏に捕えられて挫折していく女性芸術家小説である。ミックの男装は思春期の少女の女性性の受け入れ拒否を表象する衣装であり、芸術家をめざす主人公の特異性を強調する。男装からドレス姿へと着替える際の入浴は、社会が少女の成長として期待する“a regular lady”へ生まれ変わりの儀式であり、女性性の受け入れを視覚化する。男装の頃のミックの空想は自身を男性に置き換えた、慣習的な社会規範に挑戦する性差超越願望をこめたものであるが、女性性の受け入れに伴い、女性としての自己像を空想の中でも描くようになる。ドレス姿の指揮者の自己像は、「男性は仕事も勉強も両立できるが女性はどちらか一つを選択しないといけない」という社会的不均衡に反旗を翻す、ミックの思い描く芸術と女性性の両立を具現化したものである。ミックが背負う歌えない鳥のイメージは作品中でミックが自分の声を見つけようともがく様子として繰り返される。音楽家をめざしながらピアノも持たず専門教育も受けられないミックは、表現手段をもたない芸術家である。ミックに残された空想の力は芸術家として



のミックの将来にかすかな希望を託すものである。

テキストはMcCullers, Carson, *The Heart is a Lonely Hunter*, New York: Penguin Books, 1961. を使用した。

#### Notes

- 1) Freaksについて作品の視点的人物ピフは、男装をした両性具有的性格設定のtomboyミックをさまざまな形態異常と同列に捉えている。論題の“freak”はピフの認識を踏まえ、ミックを社会から期待される女性像からの逸脱者であり、社会的なグロテスクとして捉え、freaksの一員として解釈する。
- 2) 女性作家による女性を主人公とする芸術家小説についてLinda Hufは*A Portrait of the Artist as a Young Woman* (New York: Frederick Ungar Publishing, 1983)において、いくつかの類型性が見られると論じている。Hufによれば主人公の性格設定は社会の既存概念を打破しようとする冒険的、挑戦的な気質であることが多く、彼女たちは女性性と芸術家自己との葛藤を抱える。女性像のモデルとしての母は不在であり、社会から孤立した芸術家モデルや主人公を英雄的に見せる引き立て役の配置、更には芸術家としての成功の可能性が非常に低い結末などが共通して見られる特徴である。
- 3) 『心は寂しい狩人』は解釈が分かれるが、上記Linda Hufによる、ミックを主人公とする芸術家小説との解釈にたつ。
- 4) 登場人物の一人であるピフは両性具有を次のように説明する。“She was at the age when she looked as much like an overgrown boy as a girl. And on that subject why was it that the smartest people mostly missed that point? By nature all people are of both sexes. So that marriage and the bed is not all by any means. The proof? Real youth and old age, Because often old men's voices grow high and reedy and they take on a mincing walk. And old women sometimes grow fat and their voices get rough and deep and they grow dark little moustaches. And he even proved it himself -- the part of him that sometimes almost wished he was a mother and that Mick and Baby were his kids.” Carson McCullers, *The Heart is a Lonely Hunter* (New York: Penguin Books, 1961), 119.
- 5) Carson McCullers, *The Heart is a Lonely Hunter* (New York: Penguin Books, 1961), 39. これ以降のテキストからの引用は頁数のみ記す。
- 6) 南部の文学作品に登場する身体的欠陥者については楠本君恵「南部の風土とユードラ・ウエルティ」『法制大学多摩論集』4, 1988. 3. 23 - 66. を参照した。
- 7) 吉岡葉子は「カーソン・マッカーズの社会性」において「聾啞者の設定の中に、社会と絶

縁し、世界剥奪の中にある個人の根源的孤立と無自我を示している」と述べる。『徳島文理大学研究紀要』27, 1984. 49.

*The Member of the Wedding* は主人公 Frankie が少女としては背が高い事を悩み、見世物小屋の freaks の一員になるという恐怖を抱えている。見世物小屋の freaks たちの中で重要なのは The Half-Man Half-Woman である。男の子のように振舞うことの気楽さと同時にそれにより freak になる恐怖との板挟み、大人の女性になる漠然とした恐れが見世物小屋の freaks に集約されている。

- 8) Louis Westling, "Tomboys and Revolting Femininity" in Beverly Lyon Clark, and Melvin J Friedman, ed, *Critical Essays on Carson McCullers* (New York: G. K. Hall and Co., 1996), 157.
- 9) 引き立て役の例として『若草物語』のエイミー、『目覚め』のラティニョール夫人、『黄金の林檎』のキャシーが挙げられる。
- 10) 『目覚め』において芸術家としての可能性を秘めていたエドナが画家として自活すべく、屋敷を出るために主催する晩餐会を指す。
- 11) マカラーズは『悲しき酒場の唄』において彼女の両性具有の思想を体現する主人公アメリア・エバンスを登場させる。アメリアは大人の女性であるが性的に未発達であり体格、しぐさ、食欲旺盛、精力的な仕事、更に決闘場面など、*masculinity* の権化として描かれる。
- 12) レイプファンタジーについては Juliann E. Fleenor, "Rape Fantasies as Initiation Rite: Female Imagination in 'Lives of Girls and Women'" *Room of One's Own* 4 (Winter 1979) 35 - 49. を参照。
- 13) ミックの自虐行為について吉岡葉子は「カーソン・マッカラーズの子供たち」において「肉体に対する自虐行為は、肉体と精神の不融和あるいは肉体の劣性とみなすマッカラーズの思想の表れ」と解する。『徳島文理大学研究紀要』28, 1983. 170.
- 14) 性体験により成長の過程が始まるとする批評例として Gayatri Chakravorty Spivak, "A Feminist Reading: McCullers's *Heart is a Lonely Hunter*" in Beverly Lyon Clark, and Melvin J Friedman, ed, *Critical Essays on Carson McCullers* (New York: G. K. Hall and Co., 1996), 132.

ミックの成長はパーティを主催し、父を理解し共感を示す事にも認められるとする例として Richard M. Cook, *Carson McCullers* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1975), 28.

#### 参考文献一覧

- Bloom, Harold, ed. *Carson McCullers: Modern Critical Views*. New York: Chelsea House Publishers, 1986.
- Clark, Beverly Lyon and Friedman, Melvin J, ed. *Critical Essays on Carson McCullers*. New York: G.K.Hall, 1996.
- Cook, Richard M. *Carson McCullers*. New York: Frederick Ungar Publishing, 1982.
- Dews, Carlos L., ed. *Illumination and Night Glare: The Unfinished Autobiography of Carson McCullers*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1999.
- Eisinger, Chester E. *Fiction of the Forties*. Chicago: The University of Chicago Press, 1965.

- Evans, Oliver. *Carson McCullers: Her Life and Work*. London: Peter Owen, 1965.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American novel*. New York: A Scarborough Book, 1982.
- Gossett, Louise. *Violence in Recent Southern Fiction*. Durham, N. C.: Duke University Press, 1965.
- Huf, Linda. *A Portrait of the Artist as a Young Woman*. New York: Frederick Ungar Publishing, 1983.
- McDowell, Margaret B. *Carson McCullers*. Boston: Twayne Publishers, 1980.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. New York: Oxford U. P., 1985.
- Spacks, Patricia Meyer. *The Female Imagination*. New York: Avon Books, 1983.
- 楠本君恵 . 「南部の風土とユードラ・ウエルテイ」 『法制大学多摩論集』 4 , 1988. 3. 2 3 - 66。
- 吉岡葉子 . 「カーソン・マッカーズの社会性」 「南部と現代」「社会と個人」 , 『徳島文理大学研究紀要』 27 , 1983 , 43 - 54。
- . 「カーソン・マッカーズの子供たち」 拒まれている成長 , 『徳島文理大学研究紀要』 28 , 1984 , 159 - 172。

( 本学大学院博士後期課程 )